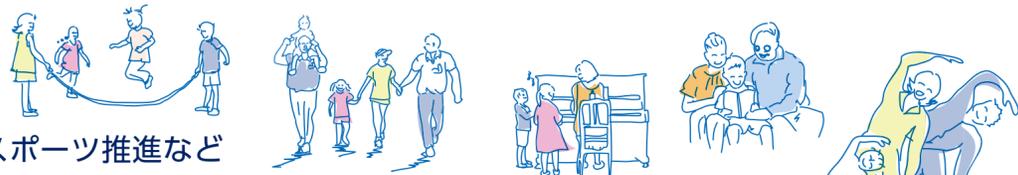


特別企画 Interview 05



女性活躍推進、文化・スポーツ推進など

より良いまちづくりを目指して 港区と地域や区民をつなぐ皆さんと共に

去る2022年8月27日、東京都港区北青山の秩父宮ラグビー場で「女子日本代表および女子セブンス日本代表キャップ授与式」が行われました。これは、日本代表として国際大会（テストマッチ）に出場した選手たちに贈られる「キャップ」を、女子ラグビーの歴史を切り開いた歴代126名の選手たちへ、過去にさかのぼって贈られたものです。

現在、ラグビー女子日本代表「サクラフィティーン」は「ラグビーワールドカップ2021」にも出場する実力ですが、キャップを贈られた黎明期の女子選手の中には、まだラグビーが「男性のスポーツ」というイメージが強かった当時からラグビーで世界に挑んだ方々も含まれています。

私は、今年で11期目を迎えた小学生向けのラグビース

クール「NPO法人みなとラグビースクール」の会長に加え、昨年度からは「関東ラグビーフットボール協会女子委員会委員長」も務めています。

高校生の女子大会など、表彰に伺うたびにその真剣さと、未来を感じさせるエネルギーに、自分がサポートできることは何か、身が引き締まる思いがします。

さて、今回の誌面では普段から一緒に活動させていただいている方々の中から、港区で活躍する女性に注目してお話をお聞きしました。港区では「女性活躍推進」を意識するまでもなく皆さん活躍されていますが、今後も政治活動において黒崎ゆういちが取り組むべき課題は何か、常に意識して活動していきます。



現在、黒崎ゆういち事務所で秘書を務める小菅礼子さんも元女子日本代表としてキャップ授与式に参加

実は男性の働き方改革である男女共同参画。社労士がその改革を後押し

東京都社会保険労務士政治連盟 臨海統括支部 統括支部会長 港支部会長

竹内 早苗氏



人事のスペシャリストである「社会保険労務士（社労士）」の方々所属し、政策への陳情を行う団体「東京都社会保険労務士政治連盟」。竹内早苗氏は、その臨海統括支部で統括支部長を務められています。特定社会保険労務士として活動し、給与計算に関する著書も出版。港区に事務所を構えて長く活動されています。

竹内氏によると、社労士が政治連盟の形で政治活動をするのは、社労士制度の発展が、そのまま「企業の健全な成長」と「労働者の福祉の向上」につながるから。中小企業行政や社会福祉関連行政などとの連携をはかりつつ、最近では、労働者としての権利や義務を学生児童に知ってもらおうと、授業への組み入れを積極的に働きかけておられます。ただ、竹内氏によると「講師は社労士が派遣するので小学校で授業させていただきます、と言っても簡単に実現するものではない」とのこと。「黒崎さんには港区とつながっていただき、実際に港区内の小学校で授業を行い、毎年夏休みにワークショップを実施するなど形になりました。活動の中で、コロナ禍では港区役所での相談会の開催なども実現しています」と語りました。

企業の人事に長く関わる竹内氏は、「社労士は、企業の発展を推進すると同時に、労働者の福祉向上も担う立場」だと語り、特に男女共同参画や女性活躍推進については「企業が取り組み始めたのは20年ほど前ですが、

実質的にはここ10年ぐらいでやっと変化が見えてきたところ」だと語ります。一方で、少子化も問題に。出産では女性に数か月の産休が必要ですが、育休は夫婦交替で取るなど男性の意識改革が不可欠とのこと。「男女共同参画は、実質的には男性の働き方改革。管理職が率先して働き方改革を行うと効果的で、育児だけでなく、介護をする人も優しい働き方になるはず」と指摘しました。

また、「女性が長く育休を取れるようになったから良かった、という話ではありません。25～35歳にかけて花形職場を経験せずに30代後半を迎えることが、管理職登用の可能性を減らしてしまいます。ずっと働いていれば開けたかもしれない役職に、届かずに終わってしまう。プランクがあっても定年までの20年を凝縮した会社体制にするのか、夫婦で半々の育休を取得するのか。65歳になるまでに男女で同じ目標が達成されるような制度になることが、あるべき姿です」と語りました。

黒崎ゆういちとは、初当選前からのかかわりがある竹内氏。「政治家として、めきめき成長されとても頼もしくなられました。スポーツを通して裏付けられたクリーンなお人柄は、豊富な実務経験と相まって親しみやすく、区民目線をお持ちの先生です。遠慮なく、ご自身のビジョンを実現すべく、今の黒崎さんのまま突き進んでください」と今後への期待を語られました。



黒崎ゆういちからひとこと

議員になる前から応援いただきありがとうございます。日頃から港区でダイバーシティアンドインクルージョンの環境を整えるための、さまざまなご助言をいただいています。今後も社労士の方々のお仕事の領域を知っていただけるような活動に取り組んでいきたいと思ひます。



「社労士は企業の発展を推進すると同時に、労働者の福祉向上を担う存在」だという竹内氏。より多くの企業で社労士が活躍することで、働きやすい職場が増えることに



2019年の「黒崎ゆういち君と港区の明日を拓く会」でのあいさつ。駅頭にも参加いただくなど、当選前からサポートいただいています

活動の中で、コロナ禍に「区内中小企業者向け労働・社会保険等無料相談コーナー」の開設が実現。相談コーナーは現在も「札の辻スクエア」で定期的実施されています



スポーツ

元プロ選手のスキルを 地域スポーツに 生かしたい

元ラグビー女子ワールドカップ 日本代表

福島 わさな氏



女子ラグビーワールドカップ2017の女子日本代表選手にも選出されるなど、ラグビー選手として活躍した福島わさな氏。現在は選手を引退し、プロのドッグトレーナーとして活動される一方、港区ラグビーフットボール協会（MRFU）で事業本部長も務め、元女子日本代表選手としての知識や経験を生かしたラグビーの普及育成に従事しています。本年度は日本ラグビーフットボール協会（JRFU）から委託を受け、港区の幼稚園・保育園、小学校、大人、障がい者など広い層に向けて行われるタグラグビーの普及事業を担当されています。特に保育園に関しては、港区のすべての園児が一度はラグビーのボールに触る機会があるそうです。

とても順調に見える福島氏のセカンドキャリアですが、実は福島氏のようなケースは珍しいようです。「元選手が引退後もラグビーを教えることで生計を立てられれば良いのですが、現実問題、ボランティアに近い報酬で依頼されることもあり、残念ながらそれでは生活でき

ません。しかし、港区で行っている事業はコーチングにきちんと価値を見いだしていただいて、この事業が自分に続く元選手たちにとっても、経験を生かせるロールモデルになればと思っています」と語りました。

福島さんはこの取り組みの中で黒崎ゆういちに出会い、「初めて会ったときは、怖そうなんだなと思ったんですが（笑）実際に話してみたら常にこちらの希望や意見を聞いていただけて、この人と一緒に仕事がしたいと思いました。選手を引退して、ドッグトレーナーとして起業をする中でいろいろな方に接しましたが、黒崎さんは誰に対してもフラットに接する方で、信用できると感じました」とコメント。福島氏は、犬の行動と心理学の専門家である「JDBA認定ドッグトレーナー」でもあり、犬と飼い主の関係改善や、犬の行動療法に取り組んでいるとのこと。港区はペット可のマンションも多く、愛犬家も多い地域。ペットと飼い主の関係をサポートする役としても活躍の機会は広そうです。



選手時代、ラグビー女子日本代表として活躍した福島氏。5歳からラグビーを始め、高校時代にはすでに女子日本代表として活躍。7人制代表「サクラセブンス」としても選出されました



「週3回以上は港区にタグラグビーの指導に行っている」という福島氏。引退後のスポーツ選手が技術を生かして活躍できるモデルケースとしても期待されています

文化

伝統文化を 子どもたちの成長に 役立てたい

日本舞踊家 子供舞踊塾 代表

有馬 和歌子氏



撮影：岡本隆史

港区生まれ港区育ちで、日本舞踊家の坂東寛二郎氏を父に持ち、2歳で国立劇場の舞台に立ったという有馬和歌子氏。弱冠24歳ながら指導経験も豊富で、すでに300人以上のお子さんに日本舞踊を指導。ご自身が主催する「子供舞踊塾」は主に港区が稽古場で、3歳から中学生まで幅広い年代の子どもたちが約60名在籍。国立劇場などの大舞台で発表を行っています。

「私のモットーは、人に喜ばれる、人の役に立つ日本舞踊を追求することです。子供舞踊塾も、日本舞踊を通して子どもたちに喜んでほしい、社会の役に立ちたいと考えて始めました。子どもたちには、習い事という枠にとどまらず、得意なことでの自分の魅力表現してほしいと考えています。なにより、大舞台に立つことで、子どもたちは驚くほど精神的に成長します。舞台の上ではひとりですから、自分で考え、お客さまに喜んでもらうためにはどうしたら良いのかという視点も意識する必要があります。その大きな経験を通して、子どもたちの可

能性を上げたいと思っています」と語りました。

伝統芸能の世界で生きる有馬氏ですが、「実は、女性だから、男性だからといううらみは感じたことはない」とのこと。「ただ、日本舞踊を仕事にするのであれば、今できることをいかにスピーディーに実現するかが重要だと思い、在学中から活動を始めました。黒崎さんにお会いしたのは大学卒業をして間もないころでしたが、こちらの年齢が若いことを気にかけず話を聞いていただき、「何か困りごとはありますか」と言っていただきました。最初はこちらが緊張しながら話していましたが、ずっと前から知り合いだったかのような雰囲気を作っていたので、日本舞踊を通して人の役に立ちたいという思いを、自分でもびっくりするくらい熱く語ったのを覚えています」とコメント。その後、港区伝統文化交流館での活動や、赤坂・青山地域の小学生や中学生向けに行われている「赤坂青山子ども共育（ともい）事業」につながっています。今後はさらに港区の他地域での活動も期待されます。



有馬氏が代表を務める「子供舞踊塾」には、3歳から中学生まで幅広い年代の子どもたちが約60名在籍。主に港区で活動中です



初対面の時から「伝統文化を通して人の役に立ちたい」という熱い思いを語っていた有馬氏。この時の相談で港区伝統文化交流館を黒崎から紹介しました



黒崎ゆういちからひとこと

地域に根差して活動されている有馬さんの、子どもたちや地域への熱い思いに圧倒されました。港区には田町の伝統文化交流館など、伝統芸能の活動に最適な場所も多くあります。今後も共育など港区の事業でもぜひ活躍ください。今後の地域の文化活動を担う若い力を応援しています。